

論 文

『羅西日対訳辞書』における
グレイヴ・アクセント「˘」表記について
—スペイン語におけるアクセントの性格から—

中 澤 信 幸

ルケティ カンポス アルド マルセロ

1. はじめに

『羅西日対訳辞書』(原題 *Dictionarium siue thesauri lingua Iaponicae compendium*) は、キリシタン宣教師ディエゴ・コリヤード (Diego Collado) によって書かれたラテン語・スペイン語・日本語の対訳辞書であり、1632年にローマで出版された。ドミニコ会の宣教師として、著者は一般の現地人の発音に注目し (Tronú Montané, 2013), 鼻音変化¹やアクセントなどの音韻論的な現象を強調して記述した。そこでは、日本語の発音を適切に反映し、キリシタン宣教師に理解させるため、母語すなわちスペイン語、およびラテン語の正書法として利用されていた記号を利用した。

しかし、それらの記号の中でも、グレイヴ・アクセント記号「˘」の役割は現時点では不明確である。コリヤードは確かに「アクセント」を表すために、この記号を使用した。また、辞書と共に出版された『日本文典』では、超分節音現象を示すために「アクセント」という用語を利用したが、日本語とコリヤードの母語とでは「アクセント」の意味はかなり違う。もちろん、現在の立場から見れば、それは自明なことなのであるが、当時はそれについての共通した定義がなかった。

このグレイヴ・アクセント表記についての考察はあまりなされてはおらず、コリヤードが一体なにを示したかったのかという疑問は、いまだ解決してはいない。

本稿の目的は、『羅西日対訳辞書』の見出し語にグレイヴ・アクセント記号が付けられる単語について分析し、この記号の役割を再評価することである。さらに、作成の背景として、コリヤードが記述した「アクセント」のコンセプトについても議論する。

その目的のために、本稿ではグレイヴ・アクセント記号が付いている単語を収集することで、

1 成嘯慶, (1995). コリヤード著『羅西日対訳辞書』のティルデ表記について. 東北大学言語学論集, 4, 121-134.

データベースを作成した。そこから、見出し語を品詞・アクセントが付いている音節・語構成によって分類した。さらに、コリヤードに関する参考著書や同時期の言語学者の考えも付け加えた上で、考察を行った。

2. 先行研究

コリヤードはどんな日本語を記述したかという問題に、最初に取り組んだのは亀井（1967）である²。ここでは、コリヤードの辞書に記載された単語は俗語形や方言形が多いという。（ドミニコ会の資料には口語が集中することを考慮すれば、これは当然のことである。）しかし、特定の方言ではなく、様々な地域の方言が記述されているとする。従って、アクセントやグレイヴ・アクセント記号を正しく解釈するためには、特定の言語変種のみアクセントのパターンと合わせるだけでは不十分である。

その点について、小島（1972）³は対応する。これによれば、確かに方言のアクセントと関係はあるが、これが最重要というわけではない。コリヤードの経歴に鑑みると、日本に在留した期間はずか3年であったが、一方でマニラには8年間在留した。マニラの日本人の人口は約3000人で、特定の地方に限ることなく、様々な地域から来ていたという（小島1972,p.35）。その8年の在留期間にコリヤードが習った日本語の影響があったと考えるのは不可能ではない。

とはいえ、日本語のアクセントの記述という意味では、コリヤードの知識は不足している。これについて、大塚・小島（1985）⁴では以下の三つを指摘していた（p. 270）。

1. 一単語にアクセントの山が1・2個以上ある。
2. アクセントの種類が頻度において極端に偏っている。
（これは「語末から二番目のアクセント」型を言及する。）
3. 複合語や助詞下接のいかににかかわらず、単語アクセントの位置が固定している。

以上によれば、コリヤードのアクセントは日本語のアクセントを反映しているとは考えられない。それ以外にも、コリヤードの日本在留と辞書の作成は10年間であり、その間母語話者と相談することはなかった。さらに、出版されたバージョンでは、稿本にはあったアクセント表記は大幅に削除された。ここで示されたアクセントが実際の日本語アクセントというのであれば、グレイヴ・アクセント表記の原理は別にある。

大塚と小島によれば、その原理はスペイン語のアクセントからの影響である。日本語とは異なり、スペイン語のアクセントはストレス・アクセントであり、位置により三つの種類がある。その中でもっとも多いのは語末から二番目の音節に付いているもので、これは「penúltimo」と呼ばれる。小島（1972）および大塚・小島（1985）によれば、その語構成にかかわらず、グレイヴ・アクセ

2 亀井孝。（1967）。コリアドの辞書に方言ありや。国語学、第69集、25-39。

3 小島幸枝。（1972）。コリヤードのアクセント－西日辞書の自筆稿本をめぐって。国語国文 / 京都大学文学部国語学国文学研究室、41、33-46。

4 大塚光信、& 小島幸枝。（1985）。コリヤード自筆西日辞書：複製・翻刻・索引および解説。臨川書店。

ントが付いている音節は常に後から二番目である。そのため、コリヤードが聞き取ったアクセントは、日本語とは異なるアクセントの種類と考えられる。小島(1972)は次のように述べている。

この、スペイン語の下地をもつコリヤードが、耳にした日本語のアクセントに、或る法則性を発見し、彼の内部で、日本語アクセントを変容させたと考える (p. 44)。

次に、岩澤(2018)⁵は小島のアイディアを深化した。先述したように、コリヤードの著作では、複合語を構成する単語のアクセントの位置は変化しない。しかし、語の構成の解釈により、複数アクセントか単数アクセントになる。コリヤードが1単語として把握すれば、単数アクセントを打つ。一方、複数アクセントが打たれている場合、各構成語は元のアクセントを守っている。岩澤(2018)によれば、このデータは同時期の外国人の宣教師に共通した語構成意識を反映している可能性がある (pp. 279-280)。

この岩澤の説を検証するために、本稿ではデータベースを作成して、コリヤードが単語を把握するにあたって、アクセントの打ち方にパターンがあるかどうかを確かめることにしたい。この調査では、岩澤が挙げた語構成という基準とともに、新たな基準も追加することにする。

3. データベース

『羅西日対訳辞書』は全355ページのうち、辞書本文は pp.5-156の152ページである。(その後 pp.165-353に追加の辞書が掲載される。) 本稿ではこのうちの約12%にあたる最初の pp.5-22から、グレイヴ・アクセントが付いている事例587を収集し、データベースを作成した。『羅西日対訳辞書』では、各項目ともローマ字による日本語見出し、ラテン語による翻訳、そして16世紀のスペイン語による翻訳で構成されている。これらをデータベースに入力した上で、日本語については仮名・漢字に変換した新たな項目を追加した。また、ラテン語の翻訳には不正確な点がある⁶ことを考慮して、項目の解釈においてはコリヤードの母語であるスペイン語を優先させた。

データは三つの基準をもとに分類した。第一は語の種類である。つまり、項目の構成と内容を理解するため、記述された単語を「単純」「派生」「複合」「文」で分類した。

それぞれについて、具体的な例を挙げる。単純語の場合、「tana (棚)」(p. 5) や「firòi (広い)」(p. 9) のように、一つの語根の語である。派生語の場合、「facàri (図り)」(p. 7) や「tacàsa (高さ)」(p. 9) のように、接辞などが付いたり語根が別の単語に変化したりする。複合語の場合、「gusòcu (具足)」(p. 12) や「cùbi tana (首玉)」(p. 22) のように、二つ以上の語根がある語である。最後に、文の場合は二つ以上の単語がある項目である。例えば「fana vo irèta mīzzu (花を入れた水)」(p. 14) のようである。

5 岩澤克。(2018). ドミニコ会文献のアクセント注記と母語単独音節 "o" の存在について. 日本近代語研究, 6, 271-290.

6 Odrštilik, J. (2020). Between Languages, Genres and Cultures: Diego Collado's Linguistic Works. *Medieval Worlds*, 11, 117-151. https://doi.org/10.1553/medievalworlds_no11_2020s117

さらに、文の場合、グレイヴ・アクセントが付いている語とは区別し、データベースに別の事例として記載した。これにより、各事例の特徴と文の中の環境を分析できるようにした。

第二はアクセントの位置である。単数のアクセントの場合は、語末からのアクセントの音節の位置を記載した。例えば、「tàna (棚)」は語末から2番目の音節にアクセントが付いているので、「2」として分類した。複数アクセントの場合は「複数」として分類した。

動詞の場合は、コリヤードが連用形と連体形を一緒に記述したので、データベースにはアクセントの位置を語形ごとに記載した。例えば、「mòye, uru (燃え, ゆる)」という項目では、連用形「mòye (燃え)」ではアクセントが付いている音節は後から2番目なので、「2」として分類した。一方、連体形「mòyuru (燃ゆる)」の場合、アクセントの位置は3番目なので、「3」として分類した。しかし、これらは同じ一つの語であるため、データベースの該当欄には「2／3」と記載した。

さらに、「複合」語の場合、現在の日本語では各語根は一緒に書かれるが、ここではコリヤードの記述を尊重した。例えば、「tòri tçuqi, u (取り付き, く)」のような項目は、「2」と記載としてした。なぜなら、「tòri」(アクセントが付いている語根)と「tçuqi, u」とは、コリヤードが別々の単語として考慮したはずだからである。一方、「mòyetachi, tçu (燃え立ち, つ)」のような項目では、語根は一緒に書かれていたので、アクセントの位置は「4」として記載した。最後に、語根が一緒に記述された複合語に複数のアクセントが付いている場合や、語根が別々に記述された複合語に複数のアクセントが付いている場合、「複数」として記載した。

第三の基準は品詞の分類である。これについては、それぞれの単語を「動詞」「名詞」「形容詞」「助詞」「副詞」「名詞的動詞」に分類した。

先述したように、この基準は、コリヤードの語構成を理解するに際して岩澤が提案した内容を、さらに深めるために加えることにした。これらを加えた理由は、アクセント表記の役割が、単にアクセントのパターンを表すものではなく、語の特徴を識別するための道具であったことを示している可能性があるからであり、それを検証するためである。

3. 1 一般的なデータ

まず、語の種類の内訳は、以下の通りである。上段は各分類の内容、下段は各分類の事例の数を表す。(以下同じ。)

単純	複合	派生	文	総数
278	249	60	91	678

次に、アクセントの位置であるが、語末から数えたグレイヴ・アクセントが付いている音節の位置の内訳は、以下の通りである。

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数	総数
104	314	36	7	2	2	30	1	1	1	89	587

また、品詞による分類の内訳は、以下の通りである。

副詞	助詞	動詞	名詞	名詞的動詞	形容詞	総数
23	7	203	331	8	14	587

以上が三つの基準による分類の割合である。ここから得られる特徴について、以下に示す。

第一に、語の種類については単純語が大半である。それに複合語、派生語と続く。

第二に、グレイヴ・アクセント記号の位置については、後から2番目の音節（「2」）が大半である。それに後から1番目の音節（「1」）、複数と続く。他はすべて10%以下の割合である。

第三に、品詞については名詞が大半である。それに動詞が続く。他はすべて10%以下の割合である。

ただし、これだけでは単なる見出し語の分類にとどまり、先述したコリヤードによる語構成の理解があきらかにできたとはいえない。そこで、以下では、語の種類および品詞ごとのアクセント記号の打ち方のパターンをあきらかにしていく。

3. 2 アクセントの位置の比較

3. 2. 1 単語の種類

コリヤードの日本語に関する記述には一貫性がない可能性があるため、ここでは語構成の分析に現代言語学的なアプローチを採用した。例えば、コリヤードの記述では語根を分けていても、「nen rɛj (年齢)」(p. 9) のような語の場合には、1語（複合語⁷）として分析した。もちろん、コリヤードの翻訳の内容とも合わせて分析している。

3. 2. 1. 1 単純

以下の表では、コリヤードが記述した一つの語根の単語における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は278。) 先の表と同様に、上段の数字は語末から数えたグレイヴ・アクセント記号が付けられた音節の位置を表す。下段は事例の数を表す。(以下同じ。)

1	2	3	4	5	1 / 2	2 / 3	3 / 4	4 / 5	5 / 6	複数
57	177	11	3	0	0	19	0	0	0	11

3. 2. 1. 2 複合

以下の表では、二つ以上の語根を持つ単語における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は249。)

1	2	3	4	5	1 / 2	2 / 3	3 / 4	4 / 5	5 / 6	複数
42	111	21	4	1	2	5	0	1	0	62

7 ここでの複合語とは、1語の中でも複数の語根に分けられる語という意味である。すなわち「年齢」であれば、「年」は「年間」「年数」のように他の語の語根に、「齢」は「高齢」「老齢」のように他の語の語根にもなり得る。

3. 2. 1. 3 派生

以下の表では、派生語、すなわち語根に接辞などが付いている語における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は60。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数
5	26	4	0	1	0	6	1	0	1	16

3. 2. 1. 4 単語の種類についてのまとめ

以上の表を見ると、語の種類に関係なく、大半の語は後から2番目の音節にアクセント記号が付いていることが分かる。つまり、「2」の位置である。単純語の場合、これに次ぐのは「1」の位置である、さらに「複数」が続く。複合・派生語の場合、「2」に次ぐのは「複数」であり、さらに「1」の位置が続く。

この情報は小島および岩澤の説と対応する。すなわち、複数アクセント記号は複合・派生語と関係があるということである。とはいえ、単純語の複数アクセントの事例数は小島および岩澤とは一致しないが、全体から見た割合は低いため例外として処置することにする。

3. 2. 2 品詞

ここでは品詞を分類する上で、コリヤードによって書かれた日本語と、彼のラテン語およびスペイン語への翻訳の両方に基づいて判断する。例えば、副詞は「vázato (わごと)」(p. 5)や「sàqini (先に)」(p. 19)などである。助詞は「màde (まで)」(p. 7)や「nì (に)」(p. 21)などである。動詞は「voximi, u (惜しみ, む)」(p. 8)や「sùqi, u (鋤き, く)」(p. 12)などである。名詞は「yèbi (えび)」(p. 18)や「fucurò (袋)」(p. 16)などである。名詞的動詞は「名詞(意味内容)+する」で構成されるもので、例えば「chacügàn xi, uru (着眼し, する)」(p. 11)や「xèccan xi, uru (折檻し, する)」(p. 18)などである。形容詞は「xiròi (白い)」(p. 8)や「firòi (広い)」(p. 9)などである。

3. 2. 2. 1 副詞

以下の表では、コリヤードが記述した副詞における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は23。)

先の表と同様に、上段の数字は語末から数えたグレイヴ・アクセント記号が付けられた音節の位置を表す。下段は事例の数を表す。(以下同じ。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数
2	7	7	1	1	0	0	0	0	0	5

3. 2. 2. 2 助詞

以下の表では、コリヤードが記述した助詞における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。

す。(総数は7。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数
6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

3. 2. 2. 3 動詞

以下の表では、コリヤードが記述した動詞における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は203。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数
19	114	7	3	0	0	28	1	1	1	29

3. 2. 2. 4 名詞

以下の表では、コリヤードが記述した名詞における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は331。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数
69	186	21	3	1	0	0	0	0	0	51

3. 2. 2. 5 名詞的動詞

以下の表では、コリヤードが記述した名詞的動詞における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は8。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／5	5／6	複数
0	3	0	0	0	2	2	0	0	0	1

3. 2. 2. 6 形容詞

以下の表では、コリヤードが記述した形容詞における、アクセント記号の位置ごとの用例数を示す。(総数は14。)

1	2	3	4	5	1／2	2／3	3／4	4／4	5／6	複数
8	3	1	0	0	0	0	0	0	0	2

3. 2. 2. 7 品詞についてのまとめ

以上の表を見ると、副詞・動詞・名詞・名詞的動詞の場合、大半は「2」の位置である。そして、副詞では、「2」とともに割合が大きいのは「3」であり、その次は「複数」である。動詞では、次に割合が大きいのは「複数」であり、その次は「2／3」である。名詞では、次に割合が大きいのは「1」であり、その次は「複数」である。名詞的動詞では、次に割合が大きいのは「1／2」と「2／3」である。

一方、助詞と形容詞は事例が少ないが、大半は「1」である。助詞の場合、「made（まで）」(p. 7) 以外はすべて1音節の単語である。形容詞では、次に割合が大きいのは「2」であり、その次は「複数」である。

3. 2. 3 アクセントの位置に関する特徴

以上のデータをもとに分析した事例の特徴について、以下に示す。

1. 語の種類や品詞にかかわらず、多くのアクセントの位置は「後から2番目」である(331例)。つまり、「penúltimo」型である。次に割合が大きいのは「後から1番目」であり、その次は「複数」である。
2. 「複数」の事例の多くは「複合語」に見られた。岩澤が述べたように、宣教師の把握と関係があるようである。

4. スペイン語のアクセントについて

先行研究でも述べていた通り、コリヤードによる日本語のアクセントの記述については、スペイン語の影響を考慮しなければならない。そこで、ここで改めてスペイン語のアクセントについて考察し、そこから先行研究についても再検討する。

4. 1 現在スペイン語のアクセント

日本語とスペイン語のアクセントの性質は違う。もちろん、両者とも超分節的な現象であるが、日本語の話者は高低アクセントを弁別し、スペイン語の話者は強調アクセント（ストレス・アクセント）を弁別する。すなわち、話者の聞き取っている情報が異なるのである。

音韻学の視点から見ると、スペイン語の強調アクセントでは、その弁別にあって話者は三つの特徴を生かす。それは声調、強調（声の強さ）と延長である。その結果として、アクセントのある音節は他の音節より、特別な強調がある。つまり、単語の中で、アクセントは、組み合わせ的に対立する2種類の音節（強い音節と弱い音節）の存在を決定する相対的な要素である（Hernando Cuadrado, 2015; Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española, 2011）⁸。例えば、「papa（法王）」の場合、アクセントの音節は後から2番目の音節であり、「pa.pa」として発音される。一方、「papá（父）」の場合、アクセントの音節は後から1番目の音節であり、「pa.pa」として発音される。

現代スペイン語の正書法では、アクセントが後から2番目の音節にある場合、単語には記号を付けずに書かれている。そして、アクセントが別の位置にある場合、アキュート・アクセント記

8 「スペイン語の韻律的なアクセントとアクセント記号」『スペイン語の新文法 音声学と音韻学』。

号「´」を文字の上に付ける。例えば、先の「papa」と「papá」との弁別である。そのため、スペイン語のアクセント表記は弁別 (diacrítico) の役割があるといわれている。

その役割によるアクセント記号の使用は16世紀に始まったが、一般的に使用されたのは17世紀からであった。しかし、現在と異なり、使われていた記号はグレイヴ・アクセント記号「`」であった。この記号の選択理由は定かではないが、これに関しては二つの仮説がある。一つは、当時使用されていた他の略表記との区別が容易だったということ、もう一つは、スペイン語の編集者が採用する前からラテン語のテキストで広く使用されていたということである (Mediavilla, 2011; Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española, 2010)。しかしながら、その時代はアクセント記号は二つの場合に使用された。一つはあまり使わない単語のアクセントの位置を表す場合であり、もう一つは他の単語と勘違いする可能性がある時にそれと区別する場合である (Hernando Cuadrado, 2015, p. 149-150)。

このように、かつては「アクセント」という用語は複数の意味に用いた。現在の基準からすると、上で説明したのは「単語アクセント」と「アクセント記号」ということになる。しかし、いまだに一般的な意味で、どちらも「アクセント」と呼ばれている (Real Academia Española, 2014)。また、口語的な話者の表現の抑揚も「アクセント」と呼ばれることがある (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española, 2011)。結果的に、「アクセント」という用語は以下の意味で用いられているのである。

1. 強調アクセント
2. 必要に応じて文字の上に付く記号
3. 話者の表現抑揚 (口語)

4. 2 スペイン語におけるアクセントの記述の歴史

この意味の幅広さを考慮すると、コリヤードのアクセント表記、また「アクセント」というコンセプトを理解するためには、同期の学者の視点を理解しなければならない。アントニョ・デ・ネブリハによって著され、1492年に出版された『カスティーリャ語の文法』(Gramática de la lengua castellana)⁹より、スペイン語のアクセントの記述は始まる。この著者にとって、「アクセント」(acento)というのは単語の抑揚である。そして、「単アクセント」¹⁰(言葉のアクセント)という現象を二つの種類に分類する。これが「グレイヴ」(grave)と「アキュート」(agudo)である。「アキュート」というのは声上がる音節であり、「グレイヴ」というのは声下がる音節である (Nebrija, 1492[2023], p.48-49)。

Así que sea la primera regla del acento simple; que cualquier palabra, no solamente en nuestra lengua, mas en cualquier otra que sea, tiene una sílaba alta que se enseñorea sobre las otras, la cual

9 最初のスペイン語の文法に関する記述。

10 ネブリハにとって、二重母音の場合は「単アクセント」は入らない。

pronunciamos por acento agudo y que todas las otras se pronuncian por acento grave.

単アクセントの最初のルールは各言葉が、われわれの言語でも他の言語でも、各単語には他の音節を支配する高い音節がある。この音節は「アキュート・アクセント」で発音される。残りの音節は「グレイヴ・アクセント」で発音される。(Nebrija, 1492[2023], p.49)

つまり、先に説明したのと同様の二項対立である。

その後、1611年に出版された『カスティーリャ語またスペイン語の宝』（原題 *Tesoro de la Lengua Castellana o Española*）で、「アクセント」の項目（名詞形）はネブリハのように音節に関する現象として記述するものの、さらに「言葉の生命と優美」と関連させた（Covarrubias Orozco, 1611, p. 58）。つまり、「単語アクセント」と抑揚とを関連させた。

El tono que hemos de dar a cada diccion, levantando la voz, ó baxandola y este da vida, y gracia a las palabras, que sin el ofenderían nuestras orejas, y serian mal entendidas; y muchas veces mudarían de sentido.

声を上げたり下げたりし、各言葉に与えるべき抑揚である。これは言葉に命と優雅を与える。そうしないと、耳に聞きにくく、誤解される。そして何度も意味が変わってしまう。

(Covarrubias Orozco, 1611, p. 58)

さらに1世紀後、1726年に出版された『専門家の辞典』（*Diccionario de Autoridades*）でも、「アクセント」の1番目と3番目の項目は、この考えを維持する。（2番目の項目は音楽におけるアクセントに関するものである。）

ACCENTO. s. m. El tono, ò sonido que se debe dár à cada palabra en el modo de pronunciarla, ò baxando, ò levantando la voz: ò segun otros. El modo con que se debe pronunciar, observando el tenór correspondiente à la voz en las syllabas breves, médias, ò largas, de que depende la grácia de su pronunciación, y no pocas veces la significación è inteligencia de la dicción.

アクセント（単数、男）声が上がったり、下がったりなど、各単語に発音する方の音調である。これは、音調を考慮すると、音節の長さにより、発音すべき方法である。語の発音の優雅、また意味と賢明さはこの特徴に依存する。

ACCENTO. Se llama tambien la nota, ò señal que se pone sobre alguna de las vocáles que tienen las palábras, para conocer su valór en el modo de pronunciarlas.

「アクセント」と呼ばれるのはいくつかの子音の上に付いている表記や記号である。ラテン語はグレイヴ・アキュート・曲折アクセントがある。カスティーリャ語では曲折アクセントは使わない。(Real Academia Española, 1726)

4. 3 コリヤードの「アクセント」のコンセプト

さて、コリヤードは1632年に出版された『日本文典』（*Ars Grammaticae Iaponicae Linguae*）の序章で、「アクセント」について説明した。

Circa uocabulorum accentus magnam adhibui curam, ut illos signis suis proprijs locis supra literas in quibus accentus fieri debent, adaptatis, sensus & sententia loquentis percipiatur: u.g. qèi xèi, habet accentum in utroque, èè, fibicàxi, habet in prima, i, & in, a, & idem in dictionario seruabitur ordo, notando accentus ea perfectione, qua summa cum diligentia potui percipere, si in aliquo sum deceptus, paratus sum corrigi.

この本ではアクセントのことに非常に気を付けた。また、話者の言葉と表現の意味を理解するため、記号は文字の上に正しく付けた。たとえば、「qèi xèi (形成)」は両方の「e」にアクセントを付け、「èè」とした。また、「fibicàxi (響かし)」は一つ目の「i」や「a」にアクセントを付けた。辞書では同じ構成を守り、できるかぎり、アクセントを正しく付けるつもりである。もし、間違いがあれば、すぐに訂正する。(Ars Grammaticae Iaponicae Linguae, p.5)

このテキスト以外には、コリヤードの著作にはアクセントについての説明がない。しかし、ここから三つの点があきらかになった。第一に、アクセントは話者の口語の重要な性質である。(4. 1で示した1に相当。) 第二に、この性質を表すため、文字の上で、正しい位置に記号を付けた。(4. 1で示した2に相当。) 第三に、そこで用いた記号は「グレイヴ・アクセント記号」である。ここでは、「アクセント」(accentus, accentum) は第一と第二の異なる意味で使われた。これは、先にも説明した通り、超分節現象に関する記述が始まってから近代言語学に至るまで、この用語に関する定義が明確ではなかったためである。

それを考慮すれば、スペイン語の背景があった学者の中で、もっとも参考となる記述はアントニオ・デ・ネブリハの著作であるかもしれない (Acevedo López, 2022)。コリヤード自身は、文典の序章の終わりに「この文典では、ネブリハと他の著者の、ラテン語の表現や名詞や代名詞などの構成を守った」と述べている (Collado, 1632, p.6)。ネブリハの著作の中でも、最も有意義なのは、1482年の『ラテン語概論』(原題 Introductiones Latinae) と1492年の『カスティーリャ語の文法』(Gramática de la lengua castellana) である。だが、前者は音節の長さや曲折アクセントに関する説明が不足していること、そして特にスペイン語についてあきらかにするため (Collado, 1632, p.175), 本稿では2番目のテキストの記述を優先することにした。

最後に、ロドリゲスの文典がコリヤードに与えた影響について考慮すべき議論がある。Spearによれば、コリヤードはイエズス会士の宣教師ロドリゲスから大きな影響を受けた (Spear, 1975)。しかし、文典ではその影響が強く見られるものの、ロドリゲスと比較してコリヤードのアクセントに関する議論は短く、また深められていない。ロドリゲスはコリヤードとは異なり、具体的な事例の比較を通じて、「四つの声」の経緯を説明し、種類を区別するための表記(「¹」 「²」 「³」 「⁴」)¹¹を提案した。そして、正しく発音する方法について議論し、日本語アクセントの移動について述べた (Rodrigues, 1604, p. 345-346)。一方、先述の通り、コリヤードはスペイン語で用い

11 ロドリゲスは、direito (直接) 「¹」, agudo (アキュート) 「²」, grave (グレイヴ) 「³」の三つの表記を提案した。

られる記号しか使わなかった。

4. 4 スペイン語の歴史を踏まえた先行研究の再検討

本稿におけるこれまでの考察では、結果的に先行研究と同じ結論に導かれるが、上記の「アクセント」と「アクセント記号」に関する分析を踏まえて、先行研究についても再検討する必要があると考える。

コリヤードが聞き取ったストレス・パターンを表す役割以外に、アクセント記号の解釈の仮説として、小島と大塚は、「vòi (甥)」(p. 87) のような一つ音節の語の場合、スペイン語母語話者の読者を二重母音として音発音させないために、コリヤードが前の母音にグレイヴ・アクセント記号を付けたとした(大塚 & 小島, 1985, p. 277)。そして、岩澤は、「penúltimo」型の優位性を考慮して、最後の音節に二重母音がある単語は、発音を二つの音節に分けるために最初の母音にアクセント記号を付けたと述べている。これは、スペイン語の正書法により、単語内に二つの母音と一緒に含まれる状況では(例えば「vomòi (思い)」p. 9)、母音 i が1音節としてカウントされるという認識に基づいている(岩澤, 2018)。

しかし、この仮説は日本語のモーラを理解していることを前提としている。これは、コリヤードと同時期の学者やネブリハの記述を見る限り、考えにくいものである。音声の単位として、スペイン語は現代言語学に至るまでアクセントの記述は一般に音節に基づく。

それにより、二重母音の解釈にも疑問がある。確かに、現代の正書法では、文字「i」の使用は母音 (/i/) の役割と語内の半母音 (/j/) の役割で使用され、他の半母音の場合は「y」が使用される(Hualde, 2014, p. 5)。とはいえ、この区別は比較的新しいものであり、18世紀に制定された正書法でその要約が定められた(Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española, 2010)。そのため、近代に至るまでの「i」の使用や習慣は、著作や著者ごとに分析すべきである。コリヤードのスペイン語では、「i」を二重母音の後母音として使用した。例えば、「corte de Rei o Emperador (都)」(p. 31) や「Rei (王)」(p. 118) の「Rei」は、[rej]と発音する。つまり、「e」と「i」を分けることなく、「i」は半母音の役割で使用した。

また、スペイン語では、「vomòi (思い)」(p.9) のようなアクセントが付いている二重母音の場合、先の母音に記号を付ければ、音節全体にアクセントがあることを示す。例えば、現代スペイン語の「óigalo (これを聞いて)」の発音は[oi.ga.lo]であり、「báilalo (これを踊って)」の発音は[bai.la.lo]である。先行研究で述べていた「先の母音にアクセントが付き、二重母音を分ける」という仮説は根拠がないものであり、通常のスペイン語の二重母音の記述とは相容れない。現代スペイン語で、二つの母音を分けて発音するのは、二つとも狭母音ではない (/a/, /o/, /e/) 場合や、一つは狭母音 (/i/ /u/) だがアクセントが付いている場合である(Hualde, 2014, p. 67)。

以上に述べたルールを除けば、コリヤードは二重母音を分けるのに文字を使用している。特に、イ形容詞の最後の「い」では、「j」がよく見られる。例えば、「nāgori vòxij (名残惜しい)」(p. 5)

や「*curùxij* (苦しい)」(p. 48) などでは、「*xi*」と「*j*」を分ける意図があったはずである。そうでなければ、その二重母音を一つの母音として聞き取ったとしたなら、「*xi*」だけを記述したであろう。(例えば、「*vàxi* (驚)」p. 12のように。) つまり、語末の「*j*」という記述をから判断するに、コリヤードは二つの母音が二重母音にならない場合があることは分かっていたはずである。とはいえ、「*vomòi* (思い)」(p. 9) のような語の記述では、その弁別は見られないが、彼はその語については弁別して聞き取ってはいなかったのか、弁別はしていてもそれを記述しなかったかの、どちらかのようなのである。

また、最初の大塚と小島の仮説に関して、助詞のデータを見ると、1音節の語にグレイヴ・アクセント記号が付いている例が見られる。そのため、「*vòi* (甥)」(p.87) は1音節語として考えれば、記号がストレスだけを示したものと考える方が自然である。

5. 結 論

以上、コリヤード『羅西日対訳辞書』のグレイヴ・アクセント記号の役割や歴史について議論した。以下にその結論をまとめる。

まず、先行研究が示した通り、辞書におけるグレイヴ・アクセント記号は、日本語のアクセントではなく、スペイン語のような強調アクセント（ストレス・アクセント）を表している（大塚 & 小島, 1985; 小島, 1972; 岩澤, 2018）。このスペイン語の影響は、グレイヴ・アクセント記号の位置に見られる。後から二番目の音節というのが、スペイン語アクセントのもっとも通常的位置である（Alcoba Rueda, 2017, p. 422）。本稿で作成したデータベースでも、この位置がもっとも多数派であり、先行研究と対応している。

さらに、岩澤（2018）が述べた通り、複合語・派生語の場合、複数のアクセント記号でコリヤードが理解した語構成を伝える意図があった。これは本稿のデータベースにおける、複数アクセント記号の事例の数字から理解できる。単純語とは異なり、複合語・派生語では、「2」（後から二番目の音節）に次いで割合が大きかったのは、「複数」であった。一方、本稿における品詞による分類では、アクセントのパターンを見いだすことはできなかった。

とはいえ、スペイン語のアクセントのコンセプトやアクセント記号の歴史を考慮すると、先行研究による仮説は受け入れられないところがある。というのは、スペイン語のアクセントの理解や、コリヤード以来のスペイン語正書法の通時的变化が考慮されていないからである。

この種の議論は過去にも示唆されていたが、記号や書記習慣を分析するためには、筆者である宣教師の母語の文法や正書法を考慮しなければならない。そうでなければ、これらの問題について一方的な見方をしてしまう可能性がある。コリヤードのこの事例は、母語が典型的に大きく異なる人々に対する外国語としての日本語教育において、こんにちでも依然として発生している問題の一つでもある。その意味で、アクセントのような超分節音の特徴は言語ごとに基準が異なるため、

学ぶのは難しい。コリヤードが使用したグレイヴ・アクセント記号は、母語の特徴を表すものであるが、日本語を記述するには不便なものであった。

キリシタン資料における現象を正確に理解するためには、記述された言語の文法や通時的変異の知識は頼りになる。本稿はその一例として、『羅西日対訳辞書』に対するグレイヴ・アクセント記号の分析を行ったものである。

参考文献

- Acevedo López, V. F. (2022). La Presencia de Nebrija en la Lingüística Misionera Española: Análisis de las publicaciones. *RILEX, Revista Sobre Investigaciones Léxicas*, 5 (3), 101–119. <https://doi.org/10.17561/rilex.5.3.7434>
- Alcoba Rueda, S. (2017). Cambios de acento en español. *Verba: Anuario Galego de Filoloxía*, 40(0), 415–452. <https://revistas.usc.gal/index.php/verba/article/view/1198>
- Collado, D. (1632). *Ars grammaticae Iaponicae linguae* (L. Hope, D. Starner, & Distributed Proofreaders (eds.) ; (2006 ed.)). Project Gutenberg. <https://www.gutenberg.org/cache/epub/17713/pg17713-images.html#prologus>
- Collado, D. (1632). 羅西日辞書 *Dictionarium siue Thesauri. Linguae Iaponicae compendium*. (大塚光信 (ed.)). 勉誠社.
- Covarrubias Orozco, S. de. (1611). *Tesoro de la lengua castellana o española* (p. 1402). <https://www.cervantesvirtual.com/obra/tesoro-de-la-lengua-castellana-o-espanola-0>
- Hernando Cuadrado, L. A. (2015). Acento prosódico y acentuación gráfica en español. *Archivum*, 65(65), 133. <https://doi.org/10.17811/arc.65.2015.133-164>
- Hualde, J. I. (2014). Los sonidos del español. In *Manual de lingüística española*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1515/9783110362084-009>
- Mediavilla, F. S. (2011). La acentuación en el siglo de oro: teoría y práctica. *Boletín de La Real Academia Española*, 91 (304).
- Nebrija, A. (1492). *Gramática de la Lengua Castellana* ([2023] ed.). Red ediciones.
- Odstrčilík, J. (2020). Between Languages, Genres and Cultures: Diego Collado's Linguistic Works. *Medieval Worlds*, 11, 117–151. https://doi.org/10.1553/medievalworlds_no11_2020s117
- Real Academia Española. (1726). *Diccionario de Autoridades* (Real Academia Española (ed.)). <https://apps2.rae.es/DA.html>
- Real Academia Española. (2014). acento. In *Diccionario de la lengua española* (23rd ed.). Real Academia Española. <https://dle.rae.es/acento?m=form>
- Real Academia Española, & Asociación de Academias de la Lengua Española. (2010). *Ortografía de la*

lengua española. Espasa Calpe.

Real Academia Española, & Asociación de Academias de la Lengua Española. (2011). *Nueva gramática de la lengua española. Fonética y fonología*. Espasa Libros.

Rodrigues, J. (1604). *Arte da lingoa de Iapam* (ミシガン大学 (ed.) ; 再版). 文化書房博文社. <https://books.google.co.jp/books?id=NwnUAAAAMAAJ>

Spear, R. L. (1975). Introduction. In R. L. Spear (Ed.), *Diego Collado's Grammar of the Japanese Language* (pp. 1-118). Center for East Asian Studies The University of Kansas.

Tronú Montané, C. (2013). Los primeros materiales para los estudios del japonés realizados por un español: Diego Collado OP. y la misión japonesa en el S.XVII. In A. Agud ...[et al.] (eds.) (Ed.), *Séptimo centenario de los estudios orientales en Salamanca* (pp. 755-762).

岩澤克. (2018). ドミニコ会文献のアクセント注記と母語単独音節 "o" の存在について. 日本近代語研究, 6, 271-290.

大塚光信, & 小島幸枝. (1985). コリヤード自筆西日辞書: 複製・翻刻・索引および解説. 臨川書店.

亀井孝. (1967). コリアドの辞書に方言ありや. 国語学, 第69集, 25-39.

小島幸枝. (1972). コリヤードのアクセント——西日辞書の自筆稿本をめぐって. 国語国文 / 京都大学文学部国語学国文学研究室, 41, 33-46.

成嘯慶. (1995). コリヤード著『羅西日対訳辞書』のティルデ表記について. 東北大学言語学論集, 4, 121-134.

Regarding Grave Accent Mark Usage in the
Dictionarium Siue Thesauri Lingua Iaponicae Compendium
(羅西日対訳辞書) : From the Viewpoint of Spanish Diacritics

Nobuyuki NAKAZAWA
Aldo Marcelo LUCCHETTI CAMPOS

Published in Rome in 1632, the *Dictionarium Siue Thesauri Lingua Iaponicae Compendium* (羅西日対訳辞書) is a trilingual Latin-Spanish-Japanese dictionary compiled by the Dominican missionary Diego de Collado. As has been noted in previous research, the role of the grave accent mark ` is often considered unclear in this dictionary as it does not correlate with Japanese accent patterns.

In order to reevaluate its role, we construct a database of words containing the grave accent, which we then classify based on three criteria: word structure, grammatical category and position. We analyse the data by comparing the first two criteria with the last, seeking patterns in Collado's accentuation.

We then discuss the influence that Spanish diacritics may have in Collado's descriptions. To achieve this, we present their characteristics, how they were elucidated by Spanish grammarians contemporaneous with Collado, and the rules regarding their usage.

We conclude that Spanish influence on Collado's understanding of diacritics, as well as descriptions of it in Japanese, are wide-ranging. This is in line with previous research by Kojima (1972), Kojima & Ōtsuka (1985) and Iwazawa (2018). That said, bearing in mind both historical changes in Spanish orthography and Collado's own writing style, we decide to distance ourselves from giving the grave accent mark a role beyond that of signalling either a stressed syllable (as heard by Collado) or the structure of derived and morphologically complex words.